勉強会「三番瀬の未来を考える」

議　事　概　要

１	日　　時	令和８年２月１９日（木）１４時００分～１５時５５分
２	場　　所	ふなばし三番瀬海浜公園学習館多目的ホール （船橋市潮見町 40 番）
３	出席機関	船橋市漁業協同組合 市川市行徳支所臨海整備課 船橋市環境部環境政策課 習志野市都市環境部環境政策課 浦安市環境部環境保全課 千葉県農林水産部水産局漁業資源課 千葉県環境生活部環境政策課 千葉県環境生活部自然保護課
４	内　　容	関連施設見学（ふなばし三番瀬環境学習館展示エリア） 講演「三番瀬の再生に向けた取組」千葉県環境生活部自然保護課 質疑・意見交換
５	結果概要	別紙のとおり

（別紙）

○関連施設見学（ふなばし三番瀬環境学習館展示エリア）

・ふなばし三番瀬環境学習館に協力いただき、三番瀬環境学習館展示エリアの見学を実施した。

・三番瀬の歴史や漁業について学習館学芸員より解説を受け、関係者の理解を深めた。

三番瀬環境学習館見学の様子

○「三番瀬の再生に向けた取組」千葉県環境生活部自然保護課

三番瀬の再生に向けた取り組みと題し、三番瀬の概要、ラムサール条約の概要、ラムサール条約登録における関係者の役割、登録のメリットやデメリットの可能性などについて講演を行った。

○全体質疑・意見交換（代表的な質疑・意見を紹介）

【質疑】

・三番瀬において、地球温暖化などの気候変動の影響により、環境や生物相など変化が生じている事例はあるか。

浦安市　専門的なモニタリング調査を行っているわけではないので、正確なことは言えないが、ＳＮＳ等を通じて情報収集を行っていた際に近年マダコがよく確認されるという情報を頻繁に目にするようになった。生物相について何らかの変化が生じている可能性がある。また、干潮時の干潟の出現箇所も常に変化している。

・千葉県唯一の条約湿地登録地である谷津干潟では登録のメリットはどのように感じているか。

習志野市　ラムサール条約の湿地に登録されることによって、他の登録湿地と交流が生まれ、各湿地の取組などを情報共有できる点はメリットだと考えている。特に、谷津干潟は国内に限らず、登録湿地のあるオーストラリアのブリスベン市との国際交流が長年行われており、自然環境保全に関する取り組みについて、お互いに共有することで、保全の推進が図られていると感じている。

・ラムサール条約の湿地に登録されることで、条約自体に何らかの規制はあるのか。

県自然保護課　ラムサール条約自体には規制はないが、条約の湿地に登録するための条件として、講演で説明したとおり国内法等によりその場所の保全が担保されることが必要となる。三番瀬の場合は国指定の鳥獣保護区特別保護地区に指定されることが条件となるため、その指定に付随して規制がかかる。

・千葉県で三番瀬以外に条約湿地登録を目指す動きはあるか。

県自然保護課　現時点でそのような動きは把握していない。過去に、木更津市の小櫃川河口の盤洲干潟を条約湿地への登録を求める声があがったことがある。現在、県と木更津市で条約登録に限らず、保全の形を検討しているところである。

・三番瀬に関する市民からの声はあるか。

船橋市　船橋市としては漁場再生を最優先に考え、そのうえで、湿地の条約への登録が進むものと考えている。三番瀬に関する関係団体の方を対象にアンケートを実施しており、個別の回答について紹介することはできないが、多様な意見をもらっている。今後も三番瀬に関わる多様な立場の方々と、コミュニケーションをとっていく。

【意見交換】

①ラムサール条約の湿地登録について

・講演を聞いて、ラムサール条約が何を目的としたものか理解が深まったと感じている。そのうえで、例えば条約湿地登録の先に、水鳥がどれくらいの数飛来するようになったらよいのか。現在も非常に多くの鳥類が飛来しているように感じている。

・三番瀬を条約の湿地に登録するうえで、鳥類を守るか魚類を守るか、保全するか利用するかといったところで対立してしまうのは非常にもったいないと感じる。いずれの立場からみても重要な場所となっていることから、登録を目指すことが、保全を推進するうえでの一つの手段として考えていただければと思う。

②三番瀬の漁業資源について

・学習館を見学していた際にアサリに関する展示があったが、三番瀬に漁獲資源となるような天然のアサリは青潮の影響などで数を減らし、現在ほとんど生息していないと思われる。ホンビノスガイもかつては、輸送船舶のバラスト水にまじって侵入して漁獲資源となっていたが、現在は数を減らしつつある。

・漁場再生のための抜本的な改善策があるわけではないが、一つ一つできることを検討しながら取り組んでく必要がある。

③三番瀬で発生する青潮について

・基本的に青潮の中では無酸素状態になるので、移動力の低い生物は死滅してしまう。かつて、海の再生産性が高かったころはアサリが青潮で死滅しても、青潮の影響を受けなかった範囲に生息していたアサリの稚貝が戻ってきて、数年後には普通に確認できるようになっていた。現在は、再生産性がないことから、もとに戻らない。アサリの稚貝が存在しないわけではないが、現在の三番瀬はそれが漁業資源となるまで成長できる環境ではないことが実情である。

④三番瀬に飛来するカワウの状況について

・漁業者の話を聞いていると、カワウが海の魚を獲っている印象はなく、漁業者の刺し網にかかった魚を狙って獲っているとのこと。カワウ対策については、県が営巣木の伐採や巣にドライアイスを投入するなど、対策を講じていると思うが、実際に個体数削減につながっているかは疑問に思うところもある。次なる手がどのようなものになるのか気になるところである。

勉強会開催風景